

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：32415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04949

研究課題名(和文) ナチュラルサポーターのための自閉スペクトラム症児の語用論的能力に関する実証研究

研究課題名(英文) Empirical study on the pragmatic ability of children with autism spectrum disorder for natural supporters

研究代表者

伊藤 恵子 (ITO, Keiko)

十文字学園女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：80326991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自閉スペクトラム症(ASD)児の語用論的能力の特徴を映像実験により調べた。その結果、発話意図を推測する上で手がかりとなる情報が顕在的に提示されれば、ASD児も定型発達(TD)児と同様に発話意図を推測できた。しかし視線分析に関しては、TD児が事物や話者の顔などと周囲の情報とを統合しているのに対し、ASD児は特定の事物や話者などの限られた対象から、話者の発話意図を推測していることが示唆された。支援に関しては、日常生活で話者の発話意図を推測するうえで、潜在的に存在する重要な文脈情報を自発的に発見し、その利用を促す学習が必要と考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ビデオ映像を用いたことで、状況の統制をはじめ音声や表情の操作及び注視点計測装置による視線解析が適切に行えたため、ASD児の非言語情報の活用をはじめ、発話意図の推測過程を周到に検討することができた。得られた知見により、既成のプログラムとは異なり、実証的データに基づいたASD児の語用論的能力の特徴に的を絞った効率的な支援が期待できる。これらの支援による早期介入は、二次的な障害を未然に防ぐことが期待できる。また、ASD児と日常をともに過ごす家族や教師等の専門家ではないナチュラルサポーターが、自然な形で配慮支援することで、各ASD児の特徴に応じた適切な日常的支援へとつなげることを可能にする。

研究成果の概要(英文)：We examined the pragmatic ability of ASD children by video experiments. The result showed that ASD children identified differences between the literal and intended meanings of the speakers' utterances. This study suggested that if the related information is saliently presented, ASD children as well as typically developing (TD) children can understand a speaker's intentions. Evaluation of the participants' eye gaze data revealed that while TD children integrate with the information around them, such as things and the speaker's face, it was suggested that ASD children were guessing the speaker's intention from a limited object, such as a particular thing or a speaker. Moreover, helping ASD children to pay attention to potentially important but implicit contextual information may be important for improving their overall comprehension of verbal cues.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自閉スペクトラム症 発話意図 表情理解 語用論的能力 ナチュラルサポーター 抽象語理解能力
注視点計測 自閉スペクトラム症指数

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 自閉スペクトラム症(ASD)児のコミュニケーション

ASD 児のコミュニケーションの困難さは、かれらの語用論的能力に帰せられている (Martin & McDonald, 2004)。ASD 児の語用論的能力の特異性は、語用論の研究領域すべてにおいて生じるともいわれており (大井, 2004)、語用論の各領域で ASD 児の語用論的能力に関する精緻な分析を実施し、基礎的データを蓄積していくことが求められている (Bishop, 1998)。研究代表者伊藤 (2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2014, 2016) は、指示詞や空項 (主語や目的語を省略する現象) に着目して ASD 児の語用論的能力の検討を実証データに基づき行ってきた。その結果 ASD 児の対人志向性の乏しさ、非言語情報の統合不全などが見出され、Prizant and Whetherby (1985) が述べているように、ASD 児の言語コミュニケーションへの支援を行う際に、その場に即した適切な言語や話しことばの獲得といった表層的行動を扱うだけでは不十分であり、語用論的能力の特徴の解明が不可欠である。

(2) ASD 児への支援

ASD 児の言語やコミュニケーションに関しては、ソーシャルスキル・トレーニング (SST; Howlin, 1999; Barnhill, 2002) をはじめ、さまざまな支援が試みられ、一定の効果が報告されている。しかし、日常生活への般化に関するデータは少なく、十分な科学的検証に基づいた支援は必ずしも多いとはいえない (Rao et al., 2008)。研究代表者伊藤 (2002, 2004, 2006, 2008, 2010, 2011) も、ASD 児に対して SST をはじめさまざまな支援を実施し、一定の効果を得てきたが、日常生活への般化は不十分である。指導場面や検査結果の向上に限定された効果では、かれらの生活の質の向上は望めない。しかし、ASD 児の語用論的能力に対して、Willcox ら (2000) は、5 歳の ASD 児の会話分析を行い、語用論上の問題を特定し、それへの適切な応答を日常場面で指導したところ、問題を減少させることに成功した。日本でも、高橋 (2005) や大井ら (2004) などが同様の支援を実施し、日常会話での一定の成果を報告している。

これらから ASD 児のコミュニケーション支援に関しては、日常生活への般化が重要な課題である。そのため、語用論的能力に的を絞った日常でのナチュラルサポーター (専門家ではない、障害者と日常をともに過ごす人々) による適切な支援は大きな成果が期待される。

2. 研究の目的

本研究では、ASD 児の語用論的能力に対する多角的実証データに基づいたナチュラルサポーターによる日常的支援を行うために、かれらの語用論的能力の特徴の解明を行うことを目的とした。具体的には、映像実験によって、発話意図に着目して、ASD 児の語用論的能力の特徴を実証的に検討した。

3. 研究の方法

17 名の ASD 児と 13 名の定型発達 (TD) 児を対象とした。言語的意味が相手を賞賛する肯定的表現 (例えば、上手ね) と、言語的意味が相手を非難する否定的表現 (例えば、下手ね) の 10 語を選定した。息子役の男児に向かって、母親役の女性話者が発するこの 10 語と肯定的状況の 5 場面 (例えば、上手な習字を見せる) と否定的状況の 5 場面 (例えば、下手な習字を見せる) を組み合わせ、賞賛・冗談・叱責・嫌味の 4 つの発話意図を構成した (Figure1)。

まず、肯定的状況か否定的状況かを判断するためのビデオ映像が、注視点計測装置 (Tobii Pro X2-30) が装着されたモニター画面上に提示され、続いて女性話者の表情が映し出された後に、上述の刺激音声ビデオ映像画面から提示された。5 場面 (靴を脱ぐ・手袋を持ってくる・テストを見せる・習字を見せる・宿題をしている) × 4 発話意図 (賞賛・冗談・叱責・嫌味) の計 20 試行の提示を行った。

個別に刺激映像 (Figure1) を視聴後、同一モニター画面上に 2 つの質問 (質問 A: お母さんの本当の気持ちは何ですか? 質問 B: それはなぜですか?) が文字と男性音声によって提示され、参加児は個別にこれらの質問に、言葉もしくは指さしによって回答した。この 2 つの質問を設定した理由は以下の通りである。質問 A: 「お母さんの本当の気持ちは何ですか?」は、発話の言語的意味と話者の発話意図の異同を理解しているかを確認するために行った。質問 B: 「それはなぜですか?」は、話者の発話意図を理解しているかを確認するために行った。

注視点の分析は、注視点計測装置 (Tobii Pro X2-30) で記録したデータを Tobii Studio Professional (version 3.2.2) を用いて分析した。

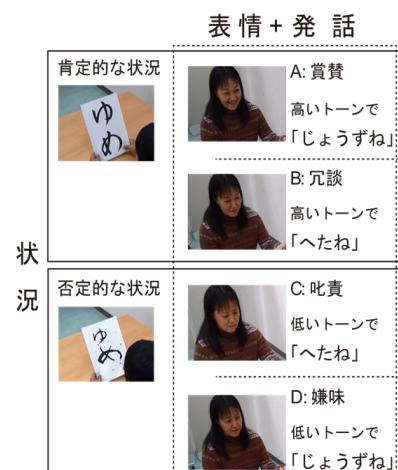


Figure 1 実験条件の例

4. 研究成果

(1) 言語的意味と発話意図の異同

質問 A の回答から、女性話者の発した言語的意味と彼女の発話意図の異同をどの程度理解しているかをみた結果を Figure 2-A に示した。対象群 (ASD・TD) × 気持ち (肯定的状況における言語的意味と一致した発話意図 (肯定一致)・不一致の発話意図 (肯定不一致)・否定的状況における言語的意味と一致した発話意図 (否定一致)・不一致の発話意図 (否定不一致)) を独立変数とし、正答数を従属変数とした混合計画の二要因分散分析を行った。その結果、主効果 (対象群: $F(1, 29) = 2.19, ns$; 気持ち: $F(3, 87) = 1.21, ns$) 及び交互作用 ($F(3, 87) = 0.15, ns$) は認められなかった。よって、女性話者の発した言語的意味と発話意図の異同についての推測に関しては、ASD 児と TD 児において違いはなかった。

(2) 発話意図の推測

質問 B の回答における発話意図推測の正答数を Figure 2-B に示した。対象群 (ASD・TD) × 発話意図 (賞賛・冗談・叱責・嫌味) を独立変数とし、正答数を従属変数とした混合計画の二要因分散分析を行った。その結果、発話意図 ($F(3, 87) = 25.93, p < .001$) のみに主効果が認められた。賞賛の場合は、冗談の場合と嫌味の場合よりも正しく発話意図を推測していた。冗談の場合は、嫌味の場合よりも正しく発話意図を推測していた。また、叱責の場合は、嫌味の場合よりも正しく発話意図を推測していた。

対象群ごとに、冗談及び嫌味の正答数と生活年齢及び語彙年齢との相関を調べた。その結果 TD 群では、いずれの相関も認められなかったが、ASD 群では、冗談の正答数においてのみ、生活年齢 ($r = .803, p < .001$) 及び語彙年齢 ($r = .770, p < .05$) と有意な相関が認められた。

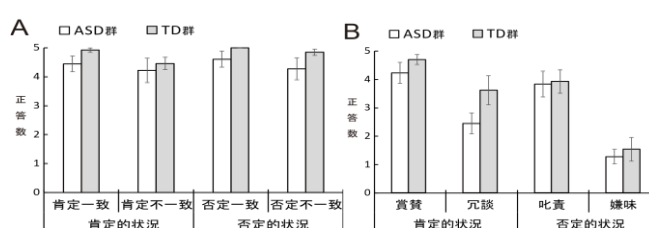


Figure 2 発話意図推測の結果

(A は言語的意味と発話意図の異同の正答数を、B は発話意図の正答数を示す)

(3) 状況判断のための事物に対する平均総注視時間

状況判断のための事物 (例えば上手か下手かといった判断をするための紙に書かれた習字) 及びそれ以外のものへの平均総注視時間を Figure 3-A に示した。対象群 (ASD・TD) × 発話意図 (賞賛・冗談・叱責・嫌味) を独立変数とし、各 AOI への総注視時間を従属変数とした混合計画の二要因分散分析を行った。状況判断のための事物に対する総注視時間では、ASD 群は TD 群より有意に長く注視していた ($F(1, 27) = 4.75, p < .05$)。しかし、状況判断のための事物以外のものに対する総注視時間では、TD 群は ASD 群より有意に長く注視していた ($F(1, 27) = 4.75, p < .05$)。

(4) 状況判断のための事物に対する平均総注視頻度

状況判断のための事物及びそれ以外のものへの平均総注視頻度を Figure 3-B に示した。対象群 (ASD・TD) × 発話意図 (賞賛・冗談・叱責・嫌味) を独立変数とし、各 AOI への総注視頻度を従属変数とした混合計画の二要因分散分析を行った。状況判断のための事物に対する総注視頻度では、TD 群は ASD 群より有意に多く注視していた ($F(1, 27) = 7.26, p < .05$)。状況判断のための事物以外のものに対する総注視頻度でも、TD 群は ASD 群よりも、注視する頻度が高い傾向があった ($F(1, 27) = 3.76, p = .063$)。

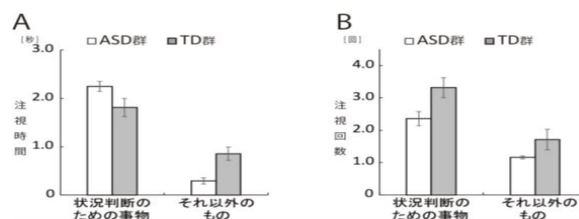


Figure 3 状況判断場面における視線分析の結果

(A は平均総注視時間を、B は平均総注視頻度を示す)

(5) 話者に対する平均総注視時間

各発話意図における話者の顔・体・話者以外への平均総注視時間及び、顔の各部分 (目・鼻・口) への平均総注視時間を Figure 4-A に示した。対象群 (ASD・TD) × 発話意図 (賞賛・冗談・叱責・嫌味) を独立変数とし、各注視点への総注視時間を従属変数とした混合計画の二要因分散分析を行った。顔に対する総注視時間においては、有意な差は認められなかった (対象群: $F(1, 25) = 1.10, ns$; 発話意図: $F(3, 75) = 0.61, ns$)。しかし、体に対する総注視時間では、ASD 群は TD 群より有意に長く体を注視していた ($F(1, 25) = 4.48, p < .05$)。発話意図 ($F(3, 75) = 3.80, p < .05$) の主効果も認められ、賞賛の場合は、叱責及び嫌味の場合よりも長く体を注視する傾向があった。話者以外に対する総注視時間においても、TD 群は ASD 群より有意に長く話者以外を注視していた ($F(1, 25) = 6.39, p < .05$)。顔の部分に関しては、目に対する総注視時間及び、口に対する総注視時間において、有意な差は認められなかった。しかし、鼻に

に対する総注視時間で、ASD 群は TD 群より有意に長く鼻を注視していた ($F(1, 25) = 5.79, p < .05$)。他に有意な主効果及び交互作用は認められなかった。

(6) 話者に対する平均総注視頻度

各発話意図における顔・体・話者以外への平均総注視頻度、及び顔の各部分(目・鼻・口)への平均総注視頻度を Figure 4-B に示した。対象群 (ASD・TD) × 発話意図 (賞賛・冗談・叱責・嫌味) を独立変数とし、各注視点への総注視頻度を従属変数とした混合計画の二要因分散分析を行った。顔に対する総注視頻度においては、有意な差は認められなかった。しかし、体に対する総注視頻度では、ASD 群は TD 群より有意に多く体を注視していた ($F(1, 25) = 5.85, p < .05$)。また、発話意図 ($F(3, 75) = 3.41, p < .05$) の主効果も認められ、賞賛の場合は、嫌味の場合より有意に多く体を注視していた。また賞賛の場合は、叱責の場合より多く体を注視する傾向があった。話者以外に対する総注視頻度では、TD 群は ASD 群より有意に多く話者以外を注視していた ($F(1, 25) = 7.85, p < .05$)。顔の部分に関しては、鼻に対する総注視頻度のみ、ASD 群は TD 群より有意に多く鼻を注視していた ($F(1, 25) = 7.95, p < .01$)。他に有意な主効果及び交互作用は認められなかった。

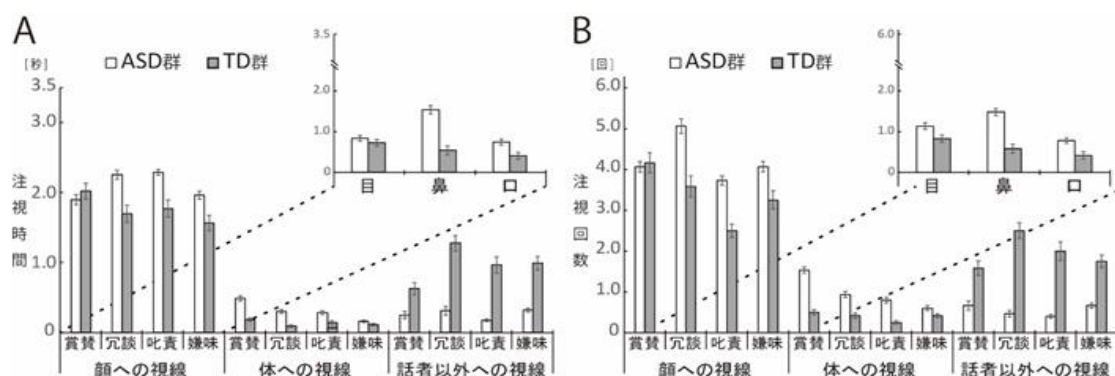


Figure 4 各発話意図における視線分析の結果

(A は平均総注視時間を、B は平均総注視頻度を示す)

(7) 支援に関して

これらの結果から、生活年齢のほか、語彙年齢が同程度であれば、まず場面状況、次に話者の表情、最後に刺激音声というように、発話意図を推測する上で手がかりとなる情報が明示的に提示される映像刺激であれば、日常生活での印象とは異なり、ASD 児は TD 児と同程度に話者の発話意図を推測することができるということが分かった。しかし実際の生活では、状況により多様な意味を有する言葉を解釈するうえで、参照すべきさまざまな情報を自ら発見しなければならず、それらの情報の統合が不可欠といえる。とくに日常会話のような動的な対人交流場面では、発せられた言語情報のほか、会話の行われている状況、相手の表情、しぐさ、プロソディといった語用論的情報を瞬時に素早く統合する能力が必須である。伊藤 (2017) によれば、TD 児はこの統合処理をほとんど無意識かつ自動的にに行っていることが示唆されている。これに対して ASD 児は、情報を統合する働きをする中枢神経系統の機能不全があるため、知的能力や言語能力の高い ASD 児者でも、現実のコミュニケーションが弱いといわれている (Frith, 2003/2005)。

今回の結果から、ASD 児のほうが TD 児よりも長く状況判断のための事物を見ている一方、それ以外のものに関しては TD 児のほうが ASD 児よりも長く見ていた。注視頻度に関しては、注視時間の結果とは異なり、TD 児は ASD 児より状況判断のための事物、それ以外のもの、ともにより頻繁に見ていた。このことは、TD 児が周囲の情報と状況判断のための事物との間に視線を頻繁に行き来させ、それらの関係を総合して状況判断しようとしていたことがうかがえる。これに対し、ASD 児は状況判断のための事物に主に視線を向け、状況を判断していた可能性がある。話者に対しては、ASD 児と TD 児は、顔、そのなかでも目や口を見ている時間や頻度に違いがなかった。その一方、TD 児に比べ ASD 児は、話者の体及び鼻への総注視時間が長く、総注視頻度も多かったのに対し、話者以外への総注視時間が短く、総注視頻度も少なかった。このことに関しても、TD 児が周囲の情報と話者の顔との間に視線を行き来させ、それらの関係を総合して話者の発話意図を推測しようとしていたことがうかがえる。これに対し、ASD 児は話者の顔と話者の体や鼻へと視線を行き来させており、主に話者からの情報をもとに、発話意図を推測しようとしていたことがうかがえる。

これらから、TD 児が特定の事物や話者の顔などと周囲の情報とを総合しているのに対し、ASD 児は特定の事物や話者といった限られた対象から、状況判断や話者の発話意図を推測しようとしていることが示唆された。そうであるならば大井 (2015) が述べているように、ASD 児へのコミュニケーション支援に際して、発話意図推測に必要な情報を明示的に提示し、それらを一つ一つ教示するというような絵やシナリオあるいはビデオを用いて行われる学習の効果には疑問が残る。むしろ日常生活で話者の発話意図を推測するうえで、潜在的に存在する重要な文脈情報を自発的に発見し、その利用を促す学習が必要といえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 伊藤恵子, 安田哲也, 小林春美, 高田栄子	4. 巻 31巻2号
2. 論文標題 発話意図推測からみた自閉スペクトラム症児の語用論的能力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 伊藤恵子, 安田哲也, 小林春美, 高田栄子	4. 巻 10
2. 論文標題 提示条件の相違による自閉スペクトラム症児の発話意図推測	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会環境論究	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安田哲也, 明地洋典, 小林春美	4. 巻 32
2. 論文標題 一見不合理に見える「わざわざ感」のある指示行為がもたらす意味情報	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 発達研究	6. 最初と最後の頁 119-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kobayashi Harumi, Yasuda Tetsuya, Igarashi Hiroshi, & Suzuki Satoshi	4. 巻 10
2. 論文標題 Language Use in Joint Action: The Means of Referring Expressions	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Social Robotics	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12369-017-0462-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤恵子	4. 巻 36巻10号
2. 論文標題 他者の意図理解と言語獲得	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 発達教育	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤恵子	4. 巻 36巻11号
2. 論文標題 他者の意図理解が困難な子どものコミュニケーション	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 発達教育	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤恵子	4. 巻 36巻12号
2. 論文標題 他者の意図理解が困難な子どもへの支援	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 発達教育	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件 (うち招待講演 8件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 伊藤恵子, 池田まさみ, 安田哲也, 高田栄子
2. 発表標題 自閉症スペクトラム指数からみた話者の心情推測時の手がかり
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤恵子
2. 発表標題 自閉症スペクトラム指数からみた自閉スペクトラム症者と定型発達者との相違
3. 学会等名 日本心理臨床学会第39回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kobayashi, H., Yasuda, T., Ishizuka, Y., & Yamamoto, J.
2. 発表標題 Young children's active use of pedagogical cues when they teach object part names to others.
3. 学会等名 Budapest CEU Conference on Cognitive Development (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤恵子, 安田哲也, 池田まさみ, 高田栄子, 小林春美
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児のコミュニケーション - 実証研究からみえてきた理解と支援 -
3. 学会等名 平成30年度 十文字学園女子大学公開講座
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤恵子
2. 発表標題 事例から学ぶ子どもの発達を促すかわり
3. 学会等名 平成30年度 さいたま市 発達障害に関する講演会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤恵子
2. 発表標題 発達障害の状態にある生徒の理解と配慮
3. 学会等名 十文字中学・高等学校教員研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kobayashi, H.
2. 発表標題 Intention sharing based on shared goals and learning : Social-Pragmatic Perspective to language development.
3. 学会等名 NII Shounan Meeting（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安田哲也, 小林春美
2. 発表標題 子どもの非明示的情報への気づきと意図推測
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kobayashi, H.
2. 発表標題 Childrend's comprehension and production of different pointing gestures.
3. 学会等名 International Cognitive Linguistics Conference (ICLC15)（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuda, T., Kashiwadata, K., & Kobayashi, H.
2. 発表標題 Demonstrative “This” and Hand Pointing Can Promote Socio-Centric Interpretations About Invisible Objects.
3. 学会等名 The 41st Annual Meeting of the Cognitive Science Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuda, T.
2. 発表標題 Coordination of pointing and eye gaze in adults teaching whole/part object labels.
3. 学会等名 International Cognitive Linguistics Conference (ICLC15) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤恵子, 安田哲也, 池田まさみ, 小林春美, 高田栄子
2. 発表標題 話者の発話意図推測に関する語用論的情報の理解 自閉スペクトラム症児者と定型発達児者との比較
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KOBAYASHI Harumi
2. 発表標題 Discussion on Origins and evolution of language: archaeological and anthropological perspectives
3. 学会等名 The Japanese Society for Language Sciences 20th Annual International Conference (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KOBAYASHI Harumi , YASUDA Tetsuya
2. 発表標題 Do children use “ fine ” ostensive communication?
3. 学会等名 EvoLang2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuda Tetsuya, Kobayashi Harumi
2. 発表標題 Comprehension of weak and strong scalar implicatures in Japanese young children and adults
3. 学会等名 Budapest CEU Conference on Cognitive Development (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KOBAYASHI Harumi
2. 発表標題 Use and comprehension of pointing as a means of intention sharing
3. 学会等名 EVOLINGUISTIC2018 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KOBAYASHI Harumi
2. 発表標題 Roles of Ostensive Communication in Language Development
3. 学会等名 International Symposium for “ Potentials and Perspectives of Communication among Humans and Agents Including Robots and Animals ” (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林春美
2. 発表標題 直示コミュニケーションが言語発達を促進する
3. 学会等名 シンポジウム「発達障害者の言語：階層性と意図共有の接点」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安田哲也, 伊藤恵子, 高田栄子, 小林春美
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児における発話の間(ま)の解釈
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤恵子, 安田哲也, 高田栄子, 小林春美
2. 発表標題 提示条件の相違によるASD児の発話意図推測
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤恵子
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児の指示詞理解における非言語情報の影響(2) - 定型発達者との比較を通して -
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小林春美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 116
3. 書名 第2章言語獲得理論『コミュニケーション発達の理論と支援』	

1. 著者名 池田まさみ	4. 発行年 2018年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 18
3. 書名 『知覚・認知心理学（放送大学教材）』石口彰(編)第14章 認知と発達 246～264.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	安田 哲也 (YASUDA Tetsuya) (90727413)	東京電機大学・理工学部・研究員 (32657)	
研究分担者	小林 春美 (KOBAYASHI Harumi) (60333530)	東京電機大学・理工学部・教授 (32657)	
研究分担者	高田 栄子 (TAKADA Eiko) (20236227)	埼玉医科大学・医学部・講師 (32409)	

